



君はラーラの熱情に
耐えられるか？

Mariano José de Larra

19世紀スペインの**革命・ロマン主義**時代を駆けぬけた、
最初のジャーナリスト、風刺作家マリアーノ・ホセ・デ・ラーラ。
憂国の想いでペンの剣を振るうも、**政治・社会**の激動、**不倫の恋**に破れ、
27歳のある日**ピストル**をこめかみに当てた――

en Madrid en
de suscripcio
ntera, n. 36.
ncias en las
es de correos.



法政大学出版局より 2023年4月上旬発売予定

ユニベルシタス叢書『ラーラ—愛と死の狭間に』

著述家 **執行草舟** によるまえがき・推薦付

マリアーノ・ホセ・デ・ラーラ

安倍三崎訳 [フアン・ルイス・アルボルグ解説]

ラーラとは何ものか——充実の文学史解説、訳注付の独自編集版、

販売価格：2,970円（税込）、四六版 456ページ

初訳の代表的記事、ロマン派戯曲『マシーアス』収録。愛の生涯と情熱の作品が一冊に！

ISBN: 978-4-588-01154-2



MARIANO JOSÉ DE LARRA

1809-1837

我々の住む幸福な世界においては、ほぼすべての不幸が真実なのだ。



ゴヤ<<愛か死か>>下絵

戦火に誕生、パリの幼少期 0-17 歳 Nacimiento-Paris-España

ナポレオン率いるフランス軍の攻め入る独立戦争(1808-1814)さなかのスペインに産声をあげる。父マリアーノ・デ・ラーラは親仏派でフランス侵略軍側のナポレオンの兄ホセ一世の軍医。1813年、フランス軍がスペインに敗れ、ポルドー、パリへ一家で避難、ラーラは進学。

1818年、父ラーラがフランススコ・デ・パウラ王子の侍従医を務めたことによる特赦をフェルナンド七世より受け、一家でスペインへ帰国。マドリッドの小学校に寄宿し、ラーラは修学。スペイン語を駆使して早熟な執筆を始める



ゴヤによる<<戦争の惨禍>>エッチング

ペンで闘う青年期 18-20 歳 Juventud del la edad del 18 al 20

18歳にして作家としての活動を始める。『日刊 風刺家ドゥエンデ』と題した5巻の雑誌を発行する。『エル・コレオ』紙を批判した記事を書き、同紙の編集長カルネレロと対立あやうく訴訟されそうになる。スペインの習慣を鋭く批判した名記事「カフェ」「闘牛」等、精力的に執筆。



書簡形式の記事挿絵：フィガロの手紙

20歳でサロンやカフェに出入りし、ロマン主義の作家、芸術家のサークル「パルナシージョ」の仲間らと議論を交わす。「1829年の地震に際して」と題した頌歌を発表、詩才は乏しく風刺文学に活路を見いだす。

20歳でホセファ・ウエトレットと結婚。二人は教養のレベル、嗜好が一致せず、ほどなくして不和となる。後にラーラは実体験から記事「間違った早婚」執筆。

不倫からピストル自殺まで 21-27 歳 Del adulterio al suicidio

21歳で実業家グリマルディのために、フランス演劇の翻訳と自身での劇作を始める。高名な弁護士マヌエル・マリア・デ・カンフロネロの息子と結婚した人妻ドロレス・アルミホと知り合い、恋に落ちる。

23歳、風刺雑誌『可哀想なお喋りさん』の第一巻が刊行される。『レビスタ・エスパニョーラ』紙に執筆協力。「古き良きスペイン人(カステリャーノ)」「公衆とは誰か、そしてどこで出会うのか」「抵当と弁済」等、名記事執筆。そのペン先鋭く、国を風刺によって叱咤激励する。



24歳、「フィガロ」のペンネームで、『レビスタ・エスパニョーラ』紙で多数執筆。

検閲によって発禁されていた愛憎劇作『マシーアス』が1834年、初演される。翌年、ドロレスとの不倫が取沙汰され、妻ホセファと離婚。26歳でバダホス、リスボン、パリ、ロンドンへ旅行。帰国後、『エル・エスパニョール』紙と、当時破格の高給で執筆契約を結ぶ。

自由主義急進派メンディサバル政権への幻滅から、自らの信条ではない穏健派イストゥリス陣営へ転向、議員として当選するも、その後、政権争いに巻き込まれ離党を余儀なくされる。27歳で社会・政治に破れ、ドロレスとの恋も破局、1837年2月13日、ピストル自殺する。



トマス・サラによる<<フィガロ>>肖像

著述家 執行草舟による推薦文

Recomendación del pensador Shigyo Sosyu



私はミゲール・デ・ウナムーノの哲学を仰ぎ見て生きて来た。私にとって、ウナムーノを理解することは、現代を認識することであり、また人間の未来を指向することであった。そのウナムーノ研究の途上で出会った思想家が、本書の主人公ラーラに他ならない。

ウナムーノを中心とする、「九八年代」と呼ばれるスペインの思想家たちが、こぞって尊敬する人物のひとりにラーラが存在していた。近代の出発において、その問題点をすべて思索していた思想家こそがラーラだったのだ…だからこそ、その思想に触れることが、現代文明を理解するための鍵を我々に与えてくれるのだ。

いま一つの時代が終わろうとしている。現代はまさに、この時代を生み出した思想を総括し、未来に向かって新しい思想を形成しなければならぬ時に当たっている。思想の把握のみが、我々に新しい未来をもたらすことができるのだ。

ラーラの目指すもの、そしてその影響下にいるスペインの哲学者たちの目指すものは「霊性文明」に限りなく近い。だからこそ、スペイン哲学が未来への懸橋と成りうるのだ。

—— 本書 まえがきより